

図版13 1.テラス西側五輪塔出土状況, 2.南側テラス全景(西より), 3.墓道入口より, 4.65~67号墓



図版14 1.60号墓五輪塔台座出土状況, 2.60号墓台座下, 3.60号墓藏骨器出土状況
4~5.石造物出土状況(南側テラス)



図版15 1 .61・62号墓(東より), 2 .63号墓(南東より), 3 .64号墓(西より), 4 .43号墓(北西より)
5 .48号円形集石(東より), 6 .48号円形集石断面(東より)



図版16 1.42号墓藏骨器出土状況, 2.36号墓藏骨器出土状況, 3.作業風景(伐開),
4.作業風景(表土ハギ取り), 5.作業風景(遺構検出), 6.遺物取り上げ



2-1



2-2



2-6



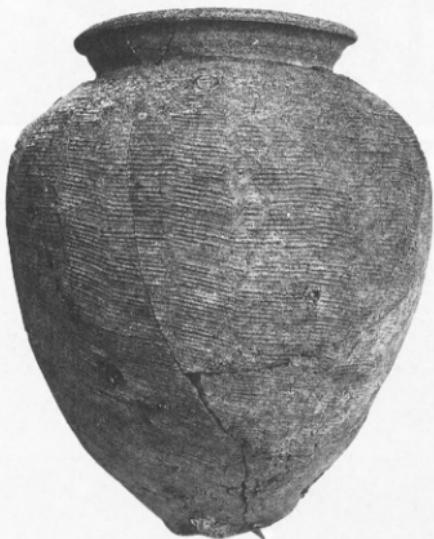
2-3



2-4



3-1



2-5

図版17 遺物写真 土師質皿・白磁・珠潤焼 (図版2, 3 参照)



3-3



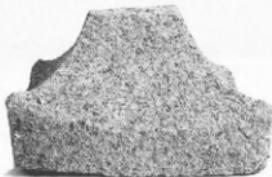
3-2



6-1



6-4



6-2



6-3



6-5



7-1

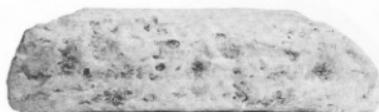


6-9

図版18 遺物写真 珠洲焼・八尾焼・五輪塔（図版3, 6, 7参照）



3-4・5・6



7-2



6-10



7-3



6-6



7-7



6-7



7-6



6-8

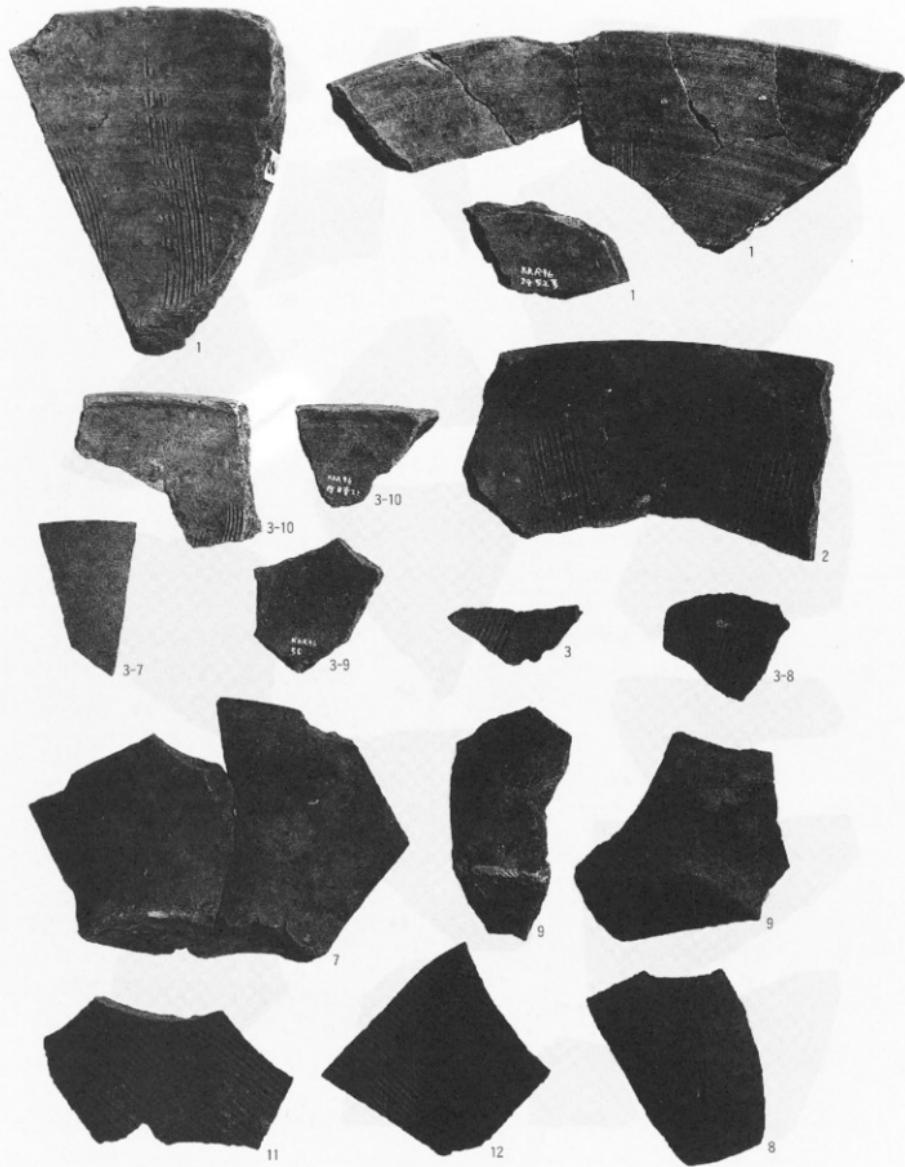


7-4

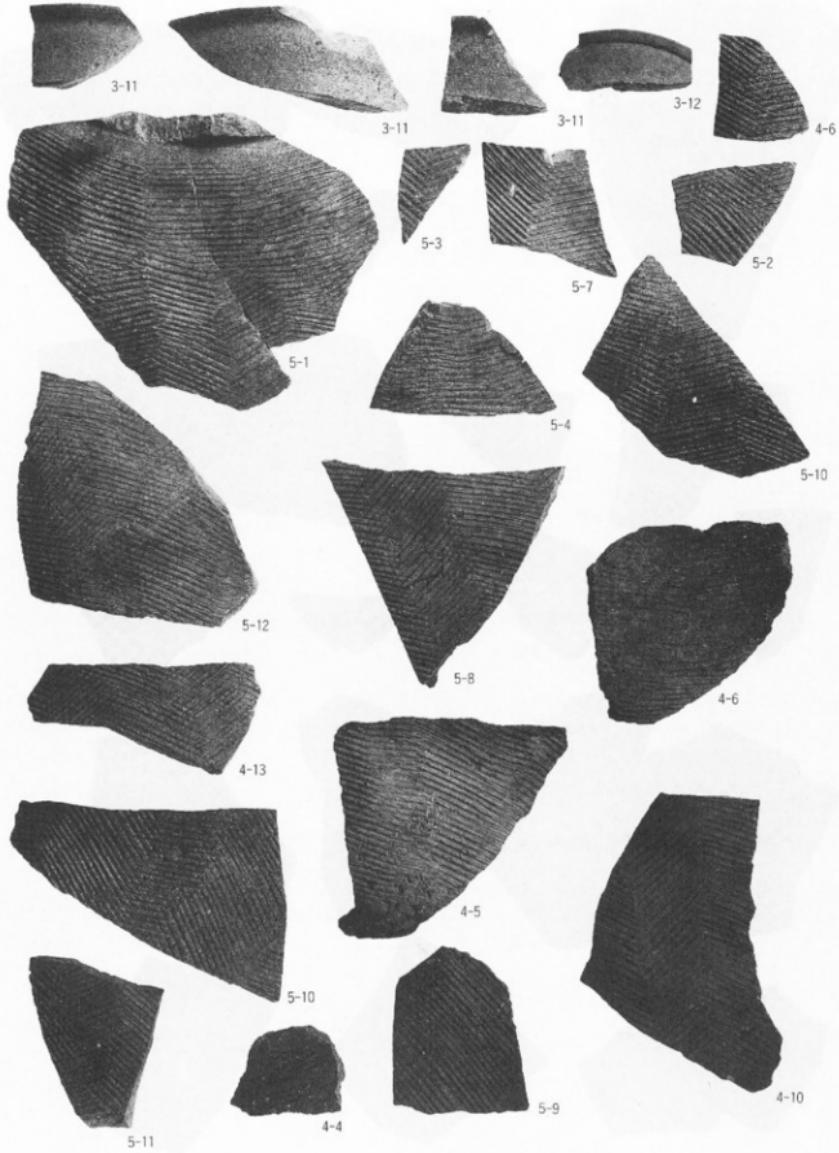


7-5

図版19 遺物写真 土師質皿・五輪塔・板碑



図版20 遺物写真 珠洲焼 (図版3, 4 参照)



図版21 遺物写真 (図版3～5 参照)

V 調査結果

3. 平成9年度の調査

(1) 黒川塚跡東遺跡の調査	129
(2)まとめ	132
引用・参考文献	133

挿図・図版等目次

第1図 遺構全図	134	図版1 黒川塚跡東遺跡周辺航空写真	142
第2図 遺構実測図(埴丘2・3・4)	136	図版2 遺物実測図(埴丘1・2)	143
第3図 遺構実測図(平坦面6~10)	137	図版3 遺物実測図(埴丘3~6、平坦面1・2、石列)	144
第4図 遺構実測図(埴丘1・5・6、平坦面2)	138	図版4 遺物実測図(平平坦面3~10、参道、遺跡東側)	145
第5図 遺構実測図(石垣遺構)	140	図版5~16 遺構写真	146~157
		図版17~21 遺物写真	158~165

(1) 黒川塚跡東遺跡の調査

1. 遺構

調査により、調査区西側半分に遺構が集中していることが確認された。全体に埴の耕作により削平を受けているが、特に南東側半分は削平が大きく、遺構は検出されなかった。埴の耕作に邪魔であったと考えられる大きめの石は、X 21400、Y 79296付近に集められている。また調査区中央部には、北西と南西を分けるように段が設けられている。この段には挙大の石が振り付けられ、調査区の北西と南東の性格を異にすることを示している。調査区北西側には方形を意識した平垣面が検出された。この平垣面には遺構が検出されることが期待されたが、検出された遺構は建物が2棟であった。この他墳丘を6基検出している。また参道と考えられる面も検出した。平垣面・墳丘・東西の作り出し等の配置から、調査範囲が1つのまとまった空間として認識されていたと推測した。

墳丘（第1~5図、図版8・10~13）

調査区西半で6基確認された。1基は方形の区画の上部に築かれ、5基は楕円形を呈する。このうち楕円形で大型墳丘2は、その左右に小型の2基を配し、遺構全体のはば中央に位置する。また墳丘5は遺構全体の南西に位置し、小型の墳丘6は山道脇に位置する。

墳丘1（第1・4図、図版13）X 21390~21398、Y 79280~79288に位置する。山道を挟んで、平坦面2の前面に位置する。平坦面2の前面が方形に作り出され、その上部が東側に向かってやや高まっている。この高まりを墳丘1とした。方形の作りだしの規模は、裾部で5.16m×5.88mである。墳丘1の裾部は4.08m×2.44m、墳頂は2.2m×1.28mを測る。方形の区画から墳頂までの高さは約30cmである。主軸は、N54°-Wである。墳頂に径50cmほどの大きな石を4個配し、その周囲に握り拳大の石が配される。方形の平坦面にも石が広がる。付近に多数の須恵器片が出土するが、主体部から確認されるものはない。平坦面2との境に後述する石列が確認された。

墳丘2（第1・2図、図版8-3、10-1・2・4）X 21390~21396、Y 79299~Y 79305に位置する。平面形は楕円形で、北西側が高く南西側が前面であることが意識されている。規模は裾部で6.32m×3.72m、墳頂で1.72m×1.2mを測る。盛土の高さは約70cmであるが、墳丘の築かれた面が北西に高く南東に低いため、墳丘前方から見ると盛土の高さよりも立派に見える。全体に握り拳大の石を配する。遺構全体のはば中央に位置し、東側に墳丘3、西側に墳丘4を配する。遺構全体の中心部分であったと考えられる。軸方向はN48°-Wである。墳丘の前面には平坦面が作り出されており、石列が祭壇と考えられる高まりを作っている。南西側を半蔵したところ、墳丘に立っていた木が、立ったまま焼けた状態を確認した。そのため墳丘の主体部は搅乱を受けている。主体部からの出土遺物は確認できなかつたが、埋土中に須恵器・繩文土器を含む。また、主体部には多量の粘土が混入し、丸く焼けこげた炭化木も確認した。理葬に関わるものと考えられ注目される。

墳丘3（第1・2図、図版8-3、11-1・2）X 21397~21400、Y 79303~79306に位置する。平面形は楕円形で、裾部の規模は2.44m×1.92mである。墳丘2の東側前方に配されている。墳頂の規模は1.56m×1.12mで、高さは約40cmである。握り拳大の石が配される。墳丘上には木が立ち、内側は搅乱を受けていると考えられる。軸方向はN48°-Wである。主体部を断ち割ったところ、埋土から須恵器片を出土するが、明確な遺物は出土しなかつた。主体部は、約30cmの円形の穴であった。

墳丘4（第1・2図、図版10-3）X 21387~21390、Y 79300~79303に位置する。平面形は楕円形で、裾部の規模は2.48m×2.08m、墳頂の規模は1.0m×0.88mである。高さは約35cmである。墳丘裾に径50cmほどの石が存在するが、墳丘頂部から転がったものではないかと考えられる。また裾部付近に握り拳大の石を配するがまばらである。軸方向はN48°-Wである。主体部は、径約40cmの穴で、明確な出土遺物はない。墳丘断面で主体部の堀肩が、確認でき

ないことから、平坦面に穴を穿ち埋納その後墳丘を築いたものとみられる。

墳丘5（第1・4図、図版7-2、11-3・4）X21374～21379、Y79292～79298に位置する。平面形は楕円形で、西側部分が道路工事により削平を受けている。残存部分で裾部の規模は6.8m×2.88m、墳頂は3.64m×1.88mである。盛土の高さは40cmである。この墳丘も盛土された面が北西に高く南東に低いため、墳丘前方から見ると盛土の高さよりも高く見える。軸方向はN57°—Wである。主体部は墳頂部に径約1mの土壤を穿ち作られている。土壤内には人頭大の花崗岩と須恵器片が出土している。

墳丘6（第1・4図、図版12-1）X21380～21383、Y79280～79283に位置する。本調査区に西側から入る山道が通っているが、その山道沿いの北側に位置する。規模は裾部で2.88m×2.5m、墳頂で1.68m×0.96mである。高さは約40cmである。軸方向はN56°—Wである。

平坦面（第1～4図、図版7～9・12）調査区西北部に方形の平坦面を10カ所確認した。いずれも畑の耕作により削平を受けていると考えられる。平坦面は墳丘の前面を平らにしたものと、周囲の面よりも高く作り出し区画を意識したものがある。特に平坦面1・9は周囲より高く作り出され目立っていたため、遺構の検出が期待された。しかし精査の結果、遺構は確認されなかった。建物の検出された平坦面2・6・8と、玉の検出された平坦面3について以下に記述する。

平坦面2（第1・4図、図版12-2・3）X21386～21394、Y79284～79292に位置する。前面には墳丘1、後方には平坦面1が位置する。平坦面2は約6m×約5.2mである。平坦面2の南東側には石列が並ぶ。石列は南東側の面が揃えられており、前面であったことを示している。石列からは、図版3-11の遺物を検出している。精査の結果、平坦面2からは2間×2間の建物跡が確認された。軸方向はN51°—Wである。平坦面2は南西ほど削平により低くなってしまい、柱穴の確認が難しいと考えられた。柱穴は直径約40cmほどのものである。

平坦面6・8（第1・3図、図版14）X21391～21406、Y79308～79320に位置する。平坦面6は4.8m×4.4m、平坦面8は約10m×約5mである。平坦面8の北側には平坦面9が一段高く造成されている。平坦面6・8・9は面的に関連していると考えられる。平坦面6・8からは建物の礎石として利用されていたと考えられる石を検出した。径80cmほどで扁平な面をもつものを平坦面6の南隅から、径60cmほどのものを平坦面6・8の境目から検出した。この礎石の間隔は約4.4mである。またこの約4m北東からは根石と考えられる集石を検出した。その他平坦面8からは北側で径60cmほどの石、南側で人頭大の石の集石を検出しているが、いずれも元位置を保ってはいないと考えられた。平坦面6・8からは須恵器甕の体部破片を検出している。

平坦面3（第1図、図版8-2）X21390～21398、Y79288～79296に位置する。建物の検出された平坦面2の北側で、墳丘2前面に位置する平坦面4の南側にある。精査の結果遺構の確認はなかったが、図版4の35～37の管玉が検出された。古墳時代のものであると考えた。

東側部分（第1図、図版8-1）X21400～21420、Y79318～79334に位置する。5段の雑壇状に整えられている。遺構全体の東隅に位置する。

西側部分（図版7-1）X21370～21384、Y79270～79280付近に位置し、当初調査範囲に含めなかった。しかし調査区東側部分に雑壇状の整地面が検出されたため、確認を行った。その結果、西側部分でも雑壇状の遺構が存在することが確認された。下草刈りを行っていないためはっきりしないが、段は3段以上とみられる。北側部分と南側部分が左右対称になっていると考えた。

石垣（第1・5図、図版15・16）X21372～21384、Y79255～79265に位置する。谷部に西側から平坦面を作り出し、その北西方向と北東方向に石を積んだ面をもつ。石垣は北東部が約5m、北西部は約4mである。これにより作り出された平坦面は、約5×30mで堂・庵などの建物が建つ可能性がある。石は径60cmほどのものが積み重ねられ、その石

と石との間に握り拳ほどの石が詰められている。石垣により作り出された平坦面の西側隅には、径約3mの盛土がある。石が積まれている。平坦面に敷石されたものが、後後に集められたものと考えた。主軸の方向はN51°—Eである。

傾斜面（第1図、図版9—3）遺跡西側と、遺跡東側に傾斜面がある。遺跡西側は昨年までの調査で確認されている黒川上山古墓群の墓道とつながる山道に続く。墓群と今回調査の平坦面の間の谷にあり谷の上がり立て西に前述の石垣遺構がある。幅3m長さ約30mを残し、残存部最低位と山道の比高差は約7mである。西側から入り、今回調査で確認した平坦面の前面を横切る。傾斜面の中程に集石が確認される。参道あるいは墓道と考えられ、今回の調査区に続く。東側はX21410～21430、Y79305～79320で、幅5m長さ約27mほどのである。平坦面9に向かってのびており、平坦面南側の縁辺を迂回するものとみられる。性格は定かでない。

2. 遺物

調査により検出した遺物は、縄文土器・土師質皿・瓦質土器・須恵器などである。縄文土器の出土はわずかであるが、墳丘造成以前は縄文時代の遺構が存在したものと考えられる。土師質皿・瓦質土器は小破片が得られたのみで、全体の器形が判別できるものはわずかであった。須恵器は墳丘の盛土上、墳丘周辺、墳丘盛土内から検出された。いずれも破片資料であり、墳丘造成の際に埋納されたものではない。そのため墳丘造成は、以下に記述する遺物の年代より下るものと考える。以下図版ごとに特徴を述べる。

図版2・17・18・19

1～5は墳丘1からの出土である。1は須恵器の壺蓋であり、復元口径約15.0cmである。端部をゆるくつまむものの、外面に端面を形成するには至っていない。時期は9世紀後半から10世紀前半のものと考えられる。2～4は須恵器・壺の体部破片である。内外面にタタキ目と当て具痕が見られる。5は瓦質土器である。6～33は墳丘2からの出土である。6～26は須恵器である。6は壺蓋であり、復元口径約13.8cmである。1同様に端部をゆるくつまむものの、外面に端面を形成するには至っていない。時期は9世紀後半から10世紀前半のものである。7は壺蓋の天井部である。8は壺蓋であり、復元口径約14.0cmを測る。時期は9世紀後半から10世紀前半のものと考えられる。9は壺蓋の天井部で、外面にヘラケズリを施す。10は壺の口縁で、復元口径約16.0cmである。11～25は壺・壺などの体部破片である。26は壺の底部と考えられる。底部は回転糸切りで、貼付け高台である。底径は5.8cmである。時期は9世紀後半から10世紀前半のものと考えられる。27は珠洲焼壺・壺類の底部で、復元底径約9cmである。28は土師質の皿である。復元底径約6.0cmである。29～32は縄文土器の破片である。29は外面に降帯を貼付し、30は沈線を施す。31の縄文は無筋のL、32は単筋のL Rが施されている。33は打製石斧である。石材は砂岩で、墳丘2の葺石として利用されていた。この他墳丘2からは、図版17①～⑦・図版18①～②・図版19①～③の土師器、図版17⑧～⑫・図版18③～⑫・図版19④～⑧の須恵器、図版19⑨の越中漸戸、図版17⑪・⑫の縄文土器が検出されている。

図版3・19・20・21

1～3は墳丘3からの出土である。いずれも須恵器の体部破片である。この他墳丘3からは図版19⑩・⑪の須恵器、⑫の土師器、⑬の縄文土器を検出している。4～7は墳丘4から検出した。7は壺の底部破片で、貼付け高台である。復元底径約7.0cmである。また墳丘4からは図版3～31・32の鉄製品と、図版19⑭～⑯の土師器、図版19の壺の須恵器を検出している。8～10は墳丘6から検出した。いずれも壺の体部破片である。内外面にタタキ目と当て具痕が見られる。11は平坦面2の前面の石列から検出された。壺の体部破片である。12～20は平坦面2から検出した。12は須恵器・壺の口縁部である。復元口径20cmほどと考えられる。この他平坦面2からは図版20②・③・⑤～⑦の須恵器、④の土師器を検出している。21～28は平坦面1からの出土である。21は須恵器・壺の口縁部破片であり、復元口径約20cmを測

る。22は須恵器・壺の口縁部である。復元口径は約28.0cmである。平坦面1からは他に図版21の①・②の須恵器を得ている。29・30は平坦面2から検出された越中瀬戸である。29は搖り鉢、30は皿の底部である。33・34は墳丘5から検出した縄文土器である。この他墳丘5からは図版20①の須恵器を検出した。35・36は平坦面2から検出した縄文土器である。35は隆帯と沈線を施す。37は平坦面2から検出した磨製石斧である。石材は蛇紋岩である。

図版4・21・22・23・24

1～3は平坦面3からの出土、4・5は平坦面4、6～9は平坦面5、10は平坦面6からの出土である。また11・12は平坦面8、13は平坦面9、14～16は平坦面7、17は平坦面10から検出した。いずれも須恵器である。14は壺の口縁部破片で、復元口径約14.0cmである。16は双耳瓶の肩部破片と考えられる。17は壺の口縁部破片であり、復元口径約15.0cmである。18・19は越中瀬戸で遺跡の東側部分、雑壇状の段から検出した。18は復元口径16.0cmである。19は皿の底部で、底径は13.2cmである。20～33は縄文土器破片で、平坦面・遺跡東側部分などからまんべんなく検出された。墳丘などが築かれる以前に縄文時代の遺構が存在したと考えられる。34はばち形の打製石斧である。石材は粘板岩で平坦面8から検出された。35・36・37は管玉である。36は穿孔されている。35には穿孔がなく、37は片面に穿孔をやりかけた跡がある。いずれも未製品である。35～37は平坦面3からの出土である。石材は蛇紋岩でいずれも古墳時代の遺物と考えられ、今回検出した遺構が築かれる以前に、古墳時代の遺構が存在した可能性がある。38～48は鉄製品である。38～45は釘状のものである。38・44の釘の頭は四角である。42・44・45は鍔の付着が多く原形を止めない。47・48は棒状の鉄製品であり、46は湧曲し突起を2つ持つが、いずれも何の一部であるかは不明である。この他、平坦面3からは図版21③～⑤の須恵器、平坦面4から図版22①・③の土師器、⑤の縄文土器、平坦面5から図版22②・④・⑥の土師器、⑦～⑨の須恵器を得ている。また列記するが、平坦面7から図版23⑥・⑦の須恵器、⑧の越中瀬戸、⑩の石材の剥片、平坦面8から図版22⑪～⑫・⑯の土師器、図版22⑬・⑭・⑯・図版23③の須恵器、図版22⑮の瓦質土器、図版23④の越中瀬戸、図版22⑯・図版23⑤の縄文土器を検出した。平坦面10からは図版23⑨の須恵器、東側の傾斜面から図版24①・②の須恵器、③～⑥の縄文土器、東側雑壇状の部分から図版24⑦～⑫の縄文土器、⑩の越中瀬戸を得た。

(2)まとめ

前章までの調査結果を踏まえ考えられる点を整理しまとめとしたい。

1. 今回の調査区は、上山古墓群と谷を隔てた東側に位置する平坦面である。平坦面は、後世の畑作で開墾された部分が多くあり必ずしも残存状況はよくない。しかしながら、平安時代以前ものとみられるの墳丘が6カ所で確認され、平坦面も10カ所中3カ所で礎石や建物の痕跡が確認された。
2. 確認された墳丘は若干、後世の攪乱により改変したものも見受けられるが、墳丘1・2は、比較的残存状況がよく、1は方形の高まりの上に築かれた墳丘、2は山の斜面を利用し梢円形の墳丘を北から南に築く。2では墳丘前面に平地を設け、祭壇状の細かい集石を持つ。明確な出土遺物は確認されなかったが、周辺及び盛り土中に8世紀から12世紀までの須恵器・珠洲焼を出土している。これらの墳丘は、古墓群より古いもの、少なくとも平安時代初頭にまで遡る古墓の可能性が高い。
3. 礎石・建物が確認できる平坦面は2・6・8の3カ所がある。このうち平坦面2では南側に石列を配し、区画しており2間×2間の堀立柱建物を検出した。南側が正面となるものと考えられ、石列・道を挟んで墳丘1が配置されている。平坦面6・8では60×50cm前後の扁平な自然石が十数個認められ現位置をとどめないものの、礎石と考えられた。これらの平坦面は墳丘のある平坦面と区分される。しかしながら平坦面と墳丘が同時に成立したか時期

差があるのかは判断できなかった。

4. 墓群と東側平坦面の間の谷に墓道ないし参道と石垣により作り出された平坦面が新たに検出された。谷間を利用し東側の平坦面向かう道で、それを見下ろす位置に石垣積みの平坦面が配されている。ここにお堂・庵・廊などの施設があったものと考えると平坦面全体が、墓群に伴う施設の存在を暗示する。

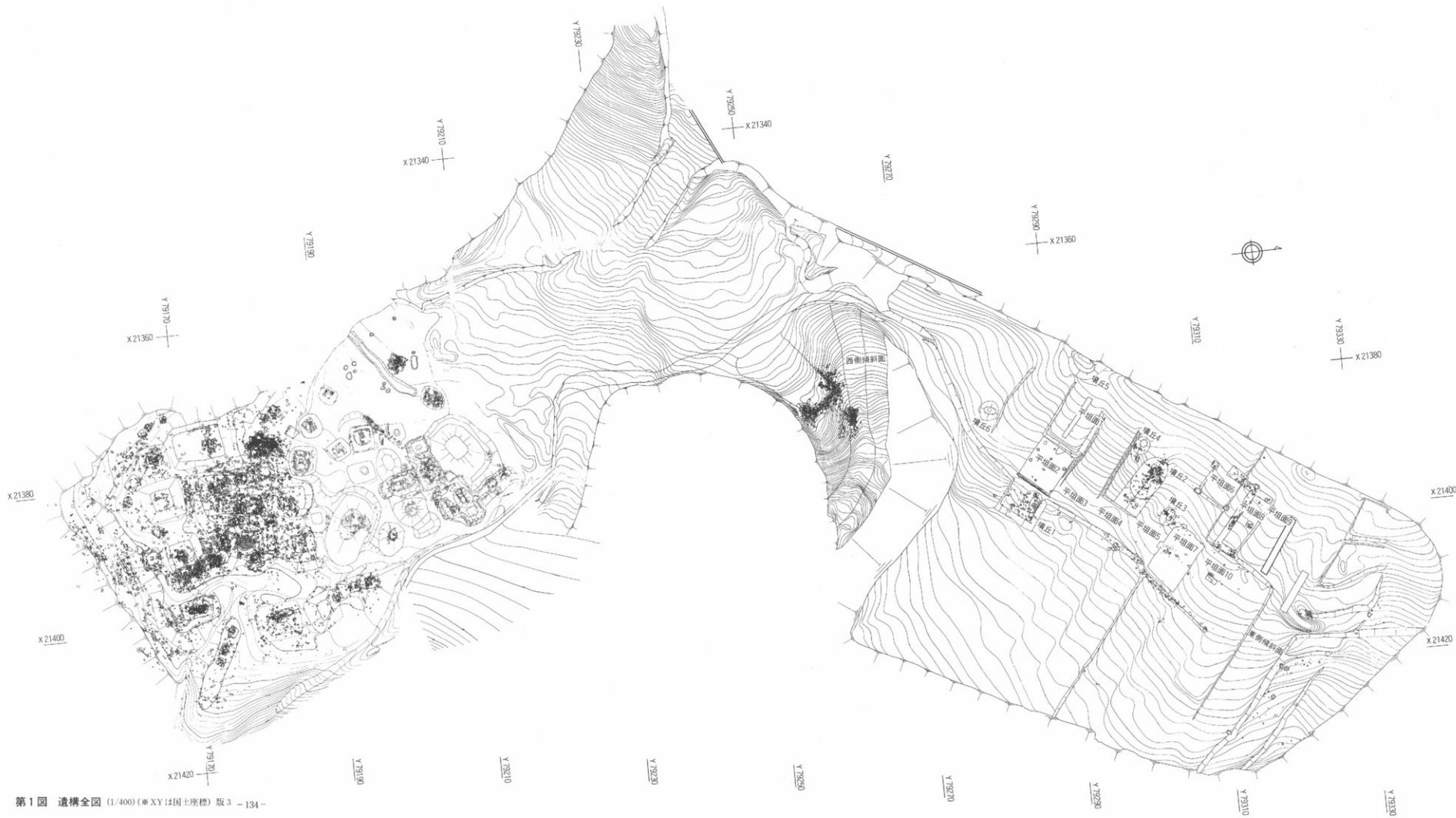
以上であるが、今回の調査で検出された遺構は、建物の存在を示してくれたが、その規模、年代についての決定的な資料は検出されなかつた。しかしながら、付近に8世紀から12世紀までの須恵器・珠洲焼などが数多く分布するところから、何らかの施設が、上山古墓群成立以前からあるいは成立時にも存在した可能性が高い。

調査地の北東に現在わずかな水量しか流れていないが、滝と思われる比高差7mの崖を確認した。直下には径約1mの滝壺も確認した。今後付近一帯で広範な分布調査を行う必要がある。

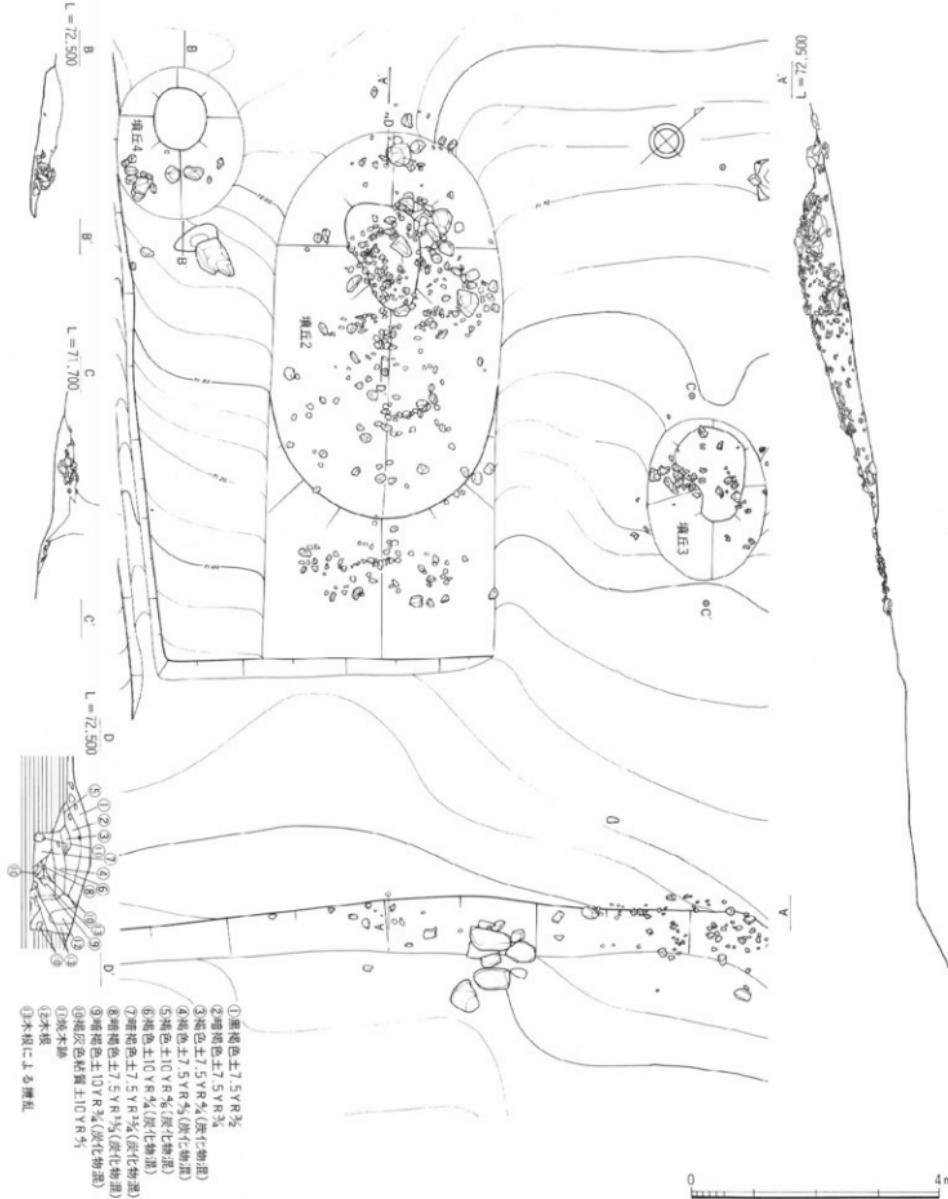
次年度は1千年前に開山されたと伝えられる旧真興寺跡の比定地を中心に調査を行う予定である。黒川地区一帯が古代から中世前期に宗教的空間であった可能性が非常に高く今後さらなる調査が必要である。

引用・参考文献

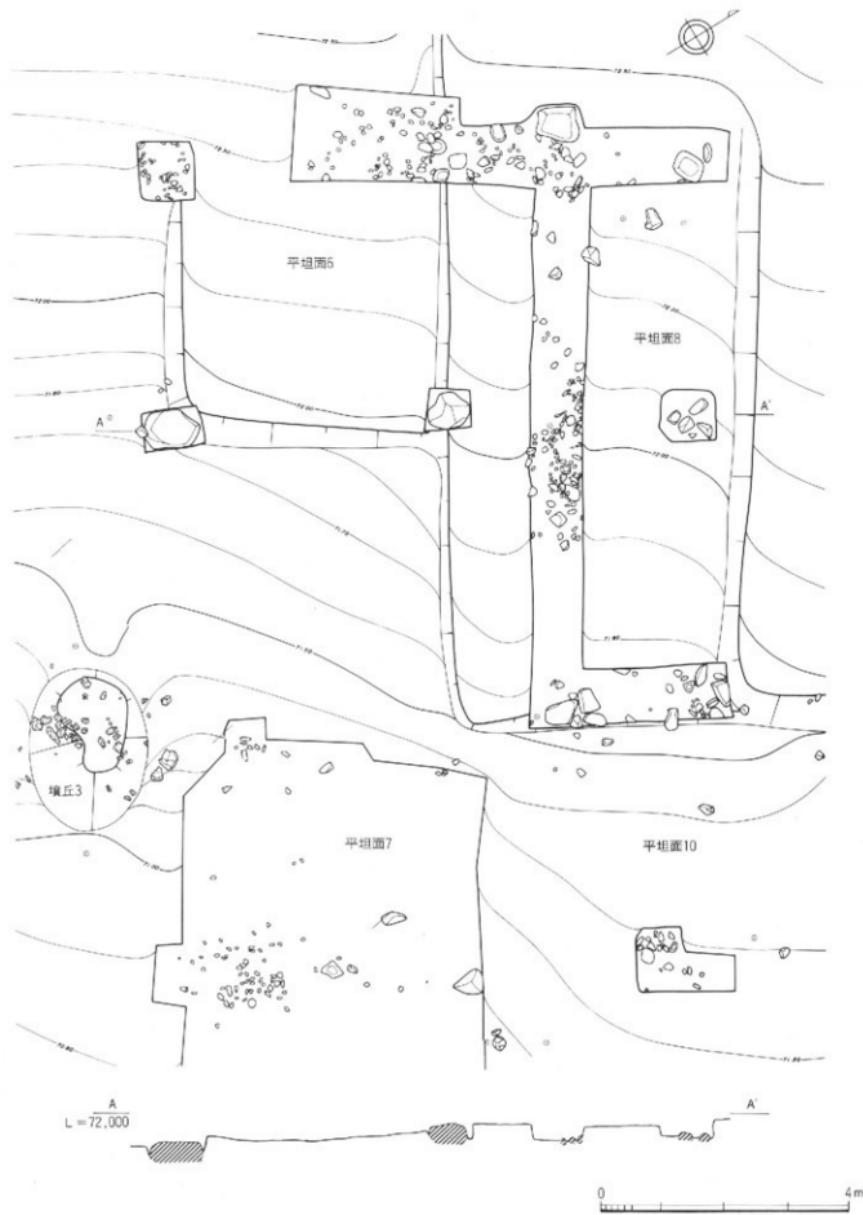
- ア 内堀信雄1988『須恵器豪類に見られる叩き目文について』『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編
- カ 上市町教育委員会1995『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』
- 上市町教育委員会1997『富山県上市町黒川上山古墓群第2次発掘調査概報』
- 『角川日本地名大辞典16富山県』1980角川書店
- タ 富山大学人文学部考古学研究室1989『越中上末窯』
- ナ 中川成夫1959『越後華報寺中世墓址の調査』『立教大学文学部史学科調査報告4』
- 中野豈任1988『忘れられた靈場』平凡社
- 西井龍儀ほか1993『医王は語る—医王山文化調査報告—』福光町・医王山文化調査委員会
- ハ 北陸中世土器研究会1994『中世北陸の寺院と墓地』第7回北陸中世土器研究会資料
- マ 埋蔵文化財研究会1983『古代・中世の墳墓について』第1・3回埋蔵文化財研究会資料
- ヤ 吉岡安暢1991『日本海域の土器・陶磁〔古代編〕－人類史叢書9－』六興出版



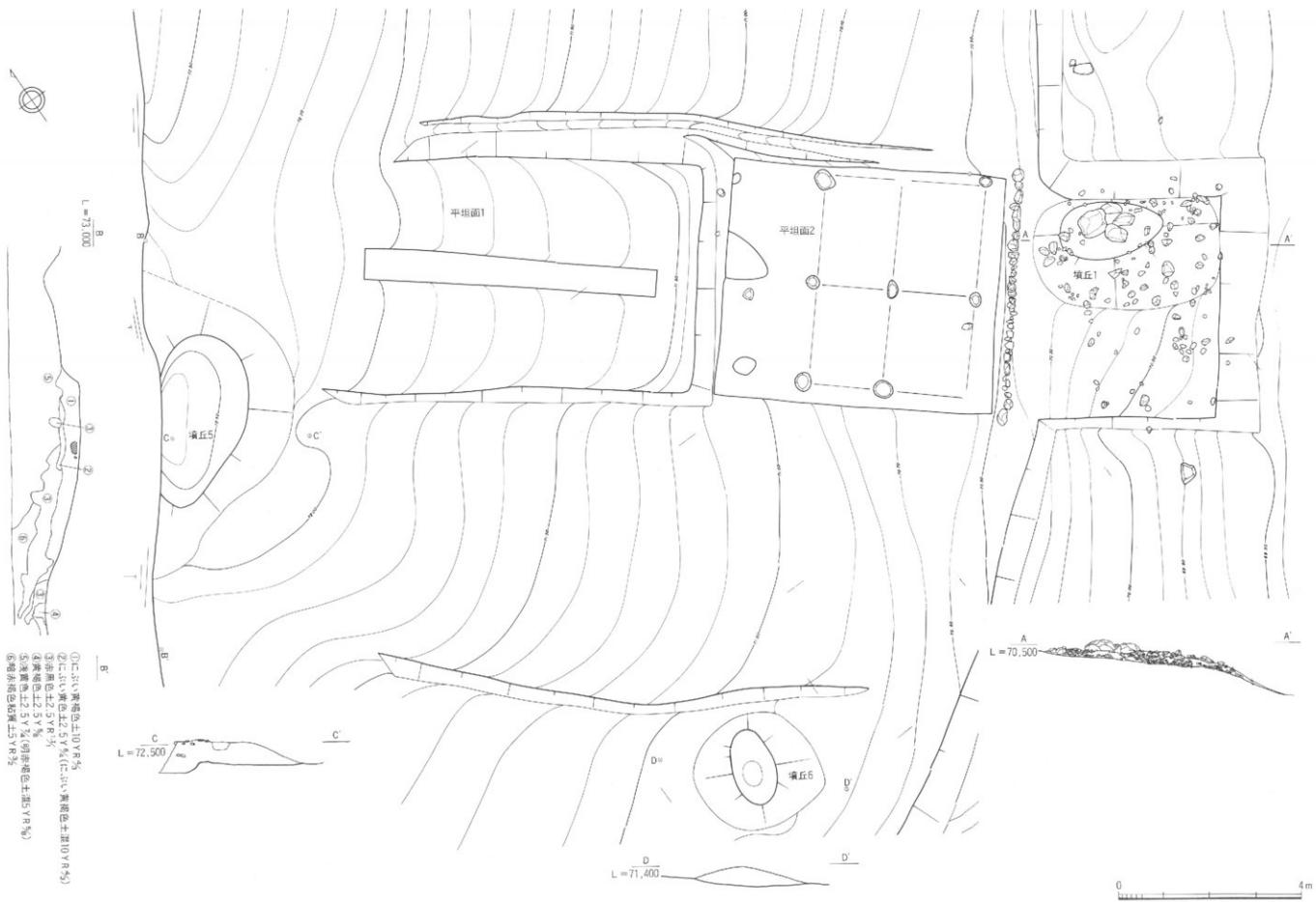
第1図 遺構全図 (1/400) (*XYは国土地標) 版3 - 134 -



第2図 遺構実測図 (縮尺1/80)
墳丘2・墳丘3・墳丘4



第3図 遺構実測図 (縮尺1/80)
平坦面 6～10 遺構検出状況



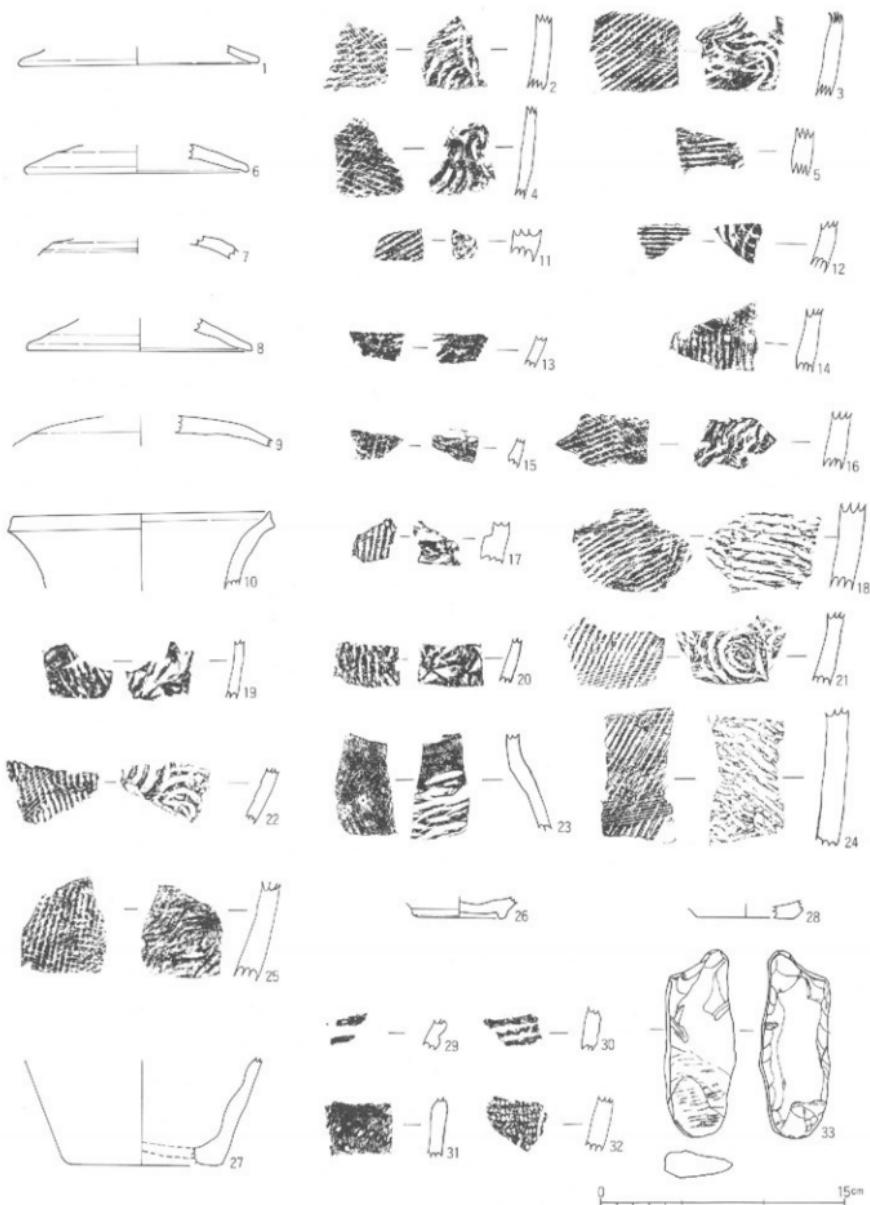
第4図 遺構実測図 (縮尺1/80)
填丘1・填丘5・填丘6 平坦面2 遺構検出状況



第5図 遺構実測図 (縮尺1/40)
石垣遺構

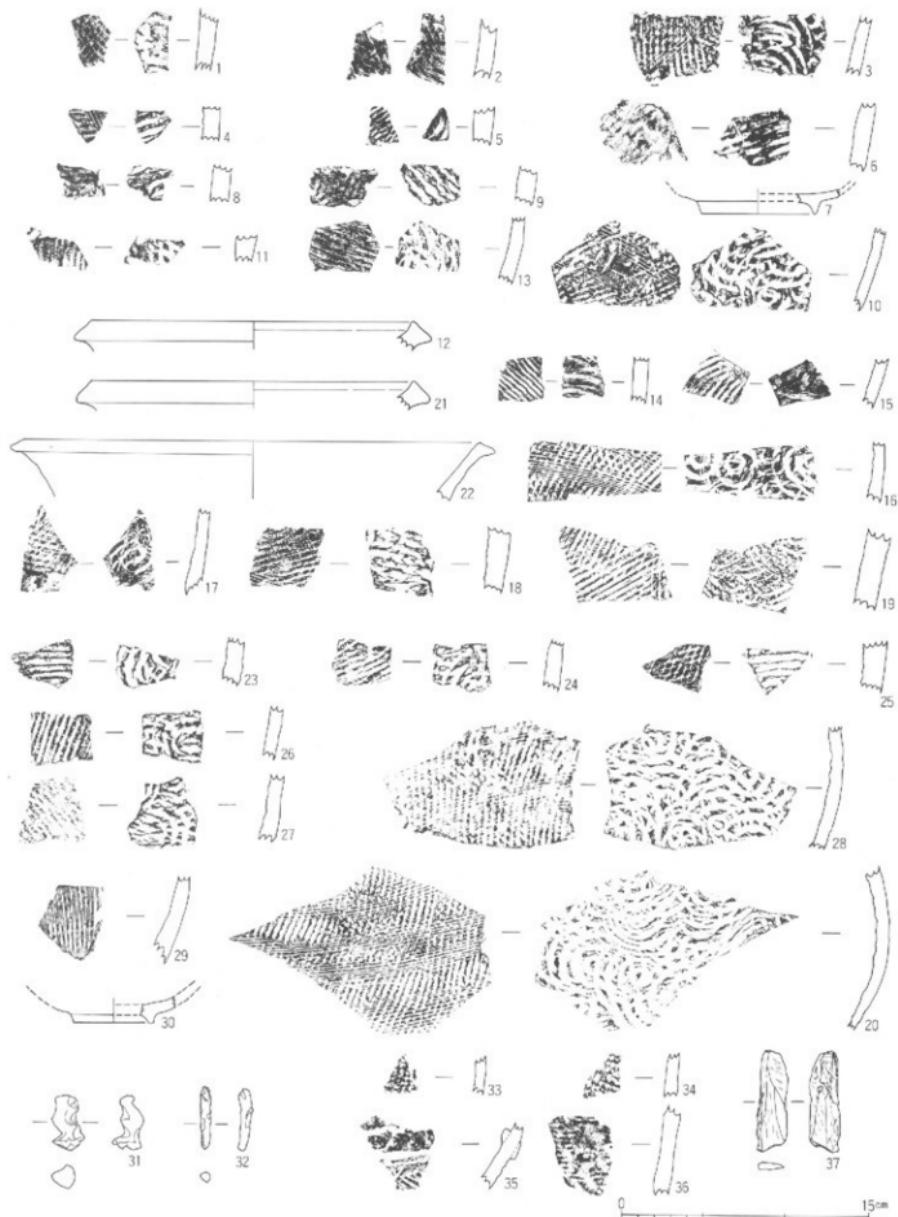


図版1 黒川塚跡東遺跡周辺航空写真（約1／6,000）



図版2 遺物実測図 (縮尺1/3)

須恵器 1~4: 墳丘1, 6~26: 墳丘2 珠洲 27: 墳丘2
 瓦質土器 5: 墳丘1 土師質皿 28: 墳丘2
 繩文土器 29~32: 墳丘2 石器 33: 墳丘2



図版3 遺物実測図 (縮尺1/1)

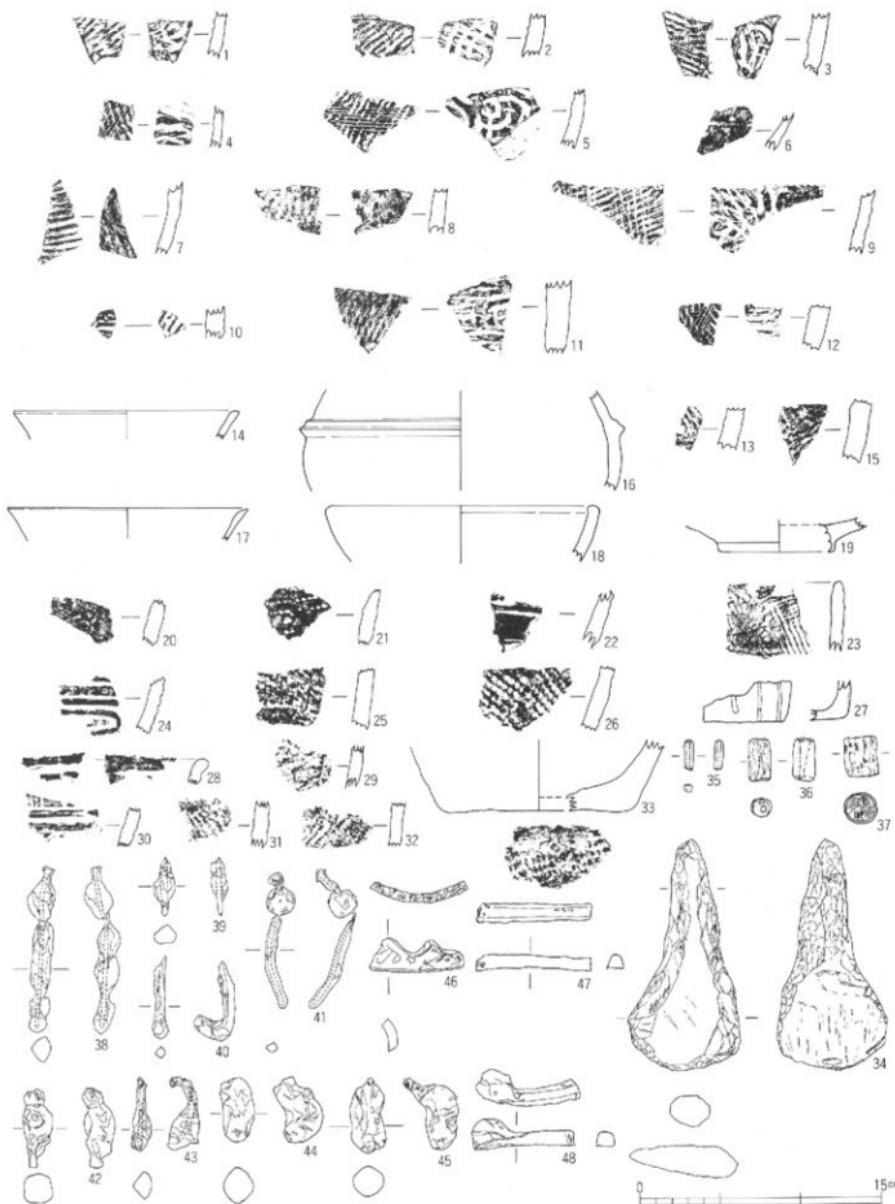
須恵器 1~3: 墳丘3, 4~7: 墳丘4, 8~10: 墳丘6, 11: 石列, 12~20: 平坦面2, 21~28: 平坦面1

越中瀬戸 29・30: 平坦面2

石器 37: 平坦面2

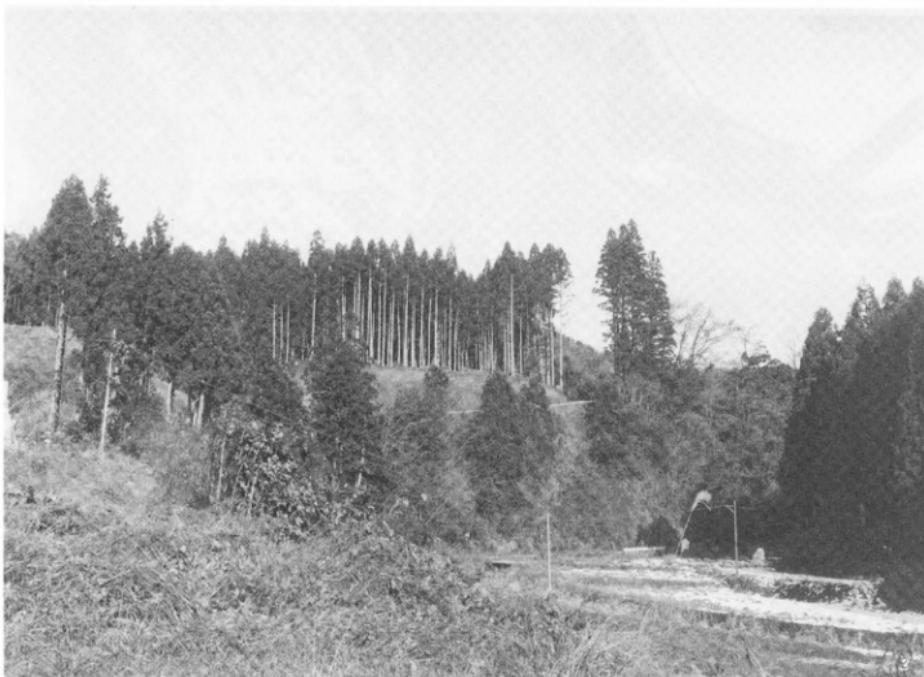
縹文土器 33・34: 墳丘5, 35・36: 平坦面2

鉄製品 31・32: 墳丘4



図版4 遺物実測図 (縮尺1/3)

須恵器 1~3: 平坦面3, 4~5: 平坦面4, 6~9: 平坦面5, 10: 平坦面6, 11~12: 平坦面8, 13: 平坦面9, 14~16: 平坦面7, 17: 平坦面10 越中瀬戸
 硬玉製品 35~37: 平坦面3
 織文土器 20~21: 平坦面10, 22~24: 平坦面8, 25~26: 平坦面9, 27: 平坦面6, 28~29, 31~32: 孝道,
 30~33: 道跡東側部分 石器 34: 平坦面8 鉄製品 38: 平坦面3, 39~45: 平坦面8, 46: 平坦面7, 47~48: 孝道



図版5 1.遺跡遠景, 2.遺跡全景(南東より)



図版6 1. 遺跡全景(南より), 2. 遺跡遠景(空中写真)



図版7 1.遺跡西側部分(南西より), 2.墳丘5遠景(南より), 3.平坦面4(南東より)



図版8 1. 遺跡東側部分(南より), 2. 平坦面3(南東より), 3. 墳丘2・墳丘3(南東より)



図版9 1. 平坦面4前面石列(南より), 2. 平坦面9(南より), 3. 東側傾斜面(南西より)



1



2



3



4

図版10 1. 墳丘2(東より), 2. 墳丘2半截状況(北西より), 3. 墳丘4(南より), 4. 墳丘2断面(南西より)



1



2



3



4

図版11 1. 墳丘3(南より), 2. 墳丘3半截状況(南西より), 3. 墳丘5(南より), 4. 墳丘5段面(西より)



図版12 1.墳丘6(南東より), 2.平坦面2造構検出状況(南東より), 3.平坦面2造構検出状況(東より)



図版13 1. 墳丘1(北西より), 2. 墳丘1(南東より)